

第41週(10月7日～10月13日)トピックス:<マイコプラズマ肺炎>

【発生動向】
マイコプラズマ肺炎は感染症法上の定点把握対象(5類感染症)であり、指定届出機関(全国約500カ所の基幹定点医療機関)から週毎に患者数が報告されています。
第41週の全国のマイコプラズマ肺炎の定点あたり報告数は1.95となり、第39週以降は、1999年4月に現在の集計方法となってから、過去最も報告数の多かった2016年第42週の1.64を超える報告数が続いています。
過去のマイコプラズマ肺炎の流行は概ね4年周期で起こっており「オリンピック肺炎」とも呼ばれていました。近年は新型コロナウイルス感染症の流行に伴う感染対策等により、その傾向は崩れていましたが、本年は流行が急拡大しています(図1)。
直近3週間の都道府県別の推移を見ると、福井県、愛知県が多い状態が続いていますが、他の地域でも県による差はあるものの、全国的な流行となっています。また、今週は京都府で4.29に急増し、上記2県に次いで3番目の報告数となっており(図2)、今後の発生動向に十分な注意が必要です。
年齢階級別の患者割合を見ると、14歳以下が87%で、中でも5～9歳の割合が41%と高く(図3)、保育園年長から小学校低学年の感染リスクが高いことが分かります。

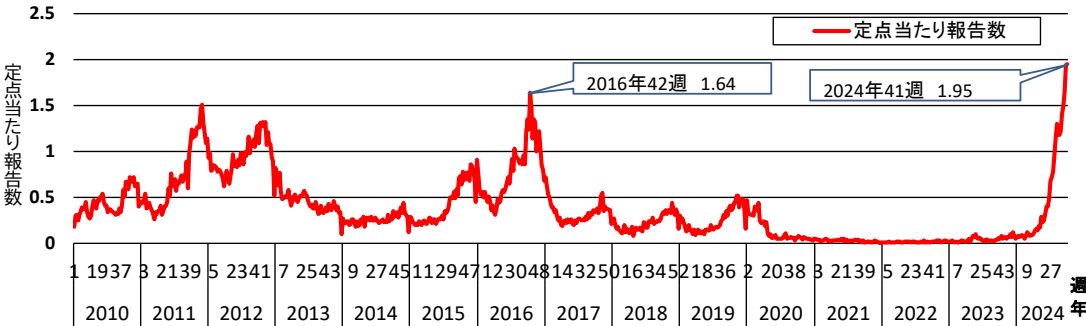
【マイコプラズマ肺炎とは】
「肺炎マイコプラズマ」という細菌に感染することによって起こる呼吸器感染症です。小児や若い人の肺炎の原因として、比較的多いものの一つです。例年、患者として報告されるもののうち、約80%は14歳以下ですが、成人の報告もみられます。1年を通じてみられ、冬にやや増加する傾向があります。
感染経路は患者の咳やくしゃみのしぶきを吸い込んだり(飛沫感染)、患者と身近で接触したりすること(接触感染)により感染します。感染してから発症するまでの潜伏期間は約2～3週間くらいとされています。

【治療】
マイコプラズマ肺炎は、細菌が原因の感染症であるため、抗菌薬での治療が可能です。多くは軽症で済みますが、重症化すると、入院治療が必要となる場合があります。せきが長引くなどの症状がある時は、医療機関で診察を受けるようにしましょう。

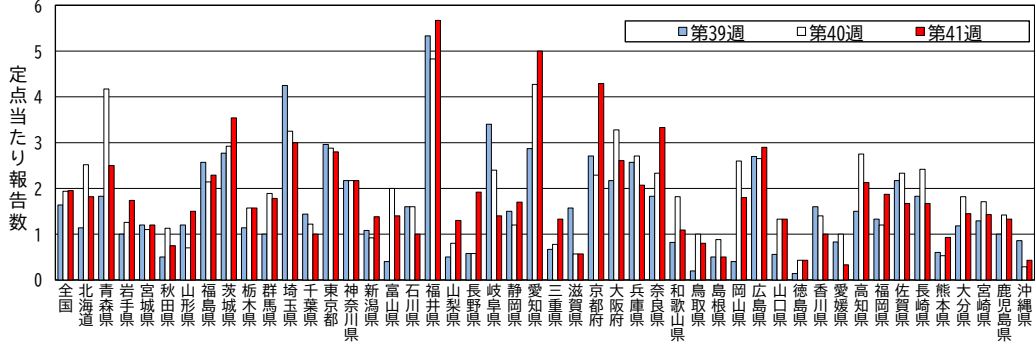
【予防】
特異的な予防方法はなく、流水や石けんを使用した、こまめな手を洗いなどの基本的対策となります。加えて接触感染予防のためにも自分専用のタオルで手を拭きましょう。また咳やくしゃみをする時には口と鼻をハンカチでおおう、場面に応じてマスクを着用する等の咳エチケットを心がけましょう。

○マイコプラズマ肺炎とは(国立感染症研究所HP)
<https://www.niid.go.jp/niid/ja/kansennohanashi/503-mycoplasma-pneumoniae.html>

(図1) 全国マイコプラズマ肺炎定点あたり報告数の推移(2010～2024.41週まで)



(図2) 都道府県別定点あたり報告数の推移(2024年39週～41週)



(図3) マイコプラズマ肺炎年齢階級別割合(全国2024年1週～41週)

